

「中国の古都を訪ねて」（平成28年4月）

「中国4千年の歴史」とよく言われますが、西安（長安）をはじめ、幾つかの古都と呼ばれる都市があります。その中で、南京では東南大学を、そして洛陽では河南科技大学を、本学の辻英明学長等と一緒に訪問し、今後の交流拡大に向けた協議などを行いました。

上海から南京までは列車でわずか1時間余り、中国の高速交通網整備のスピードの速さに、あらためて驚かされました。市内では、延々と続く城壁や立派な城門により、往時を偲ぶことができます。プラタナス（鈴懸の木）を中心とした街路樹が、至る所でうっそうと茂って緑のトンネルを作っており、市民に憩いと安らぎを与えています。東南大学のキャンパスにも、大樹の並木道がありましたが、訪問時の4月中旬はちょうど、花粉が次々と舞い落ちる時期でした。最初は風情があると思ったのですが、あまりにも大量の花粉が目や鼻、喉等を刺激し、涙や咳が止まらなくなりました。地面に落ちた花粉の処理も含め、こうした環境下で生活する皆さんの大変さが実感できました。



中国でも高齢化対策が大きな課題となっており、東南大学からは、特に看護や在宅介護に関する協力依頼がありました。この分野での日本の進んだ状況を、学生や教員に学習・経験させたいとのことでした。また、情報工学等他の分野も含め、大学院を中心に、ハイレベルの教育・研究交流を期待されていることが分かりました。

中国では、毎年6月に実施される「高考」（大学入学共通試験）の獲得点数により、各自が入学できる大学が決まります。東南大学は、南京のみならず全国でもトップクラスの点数が必要です。そのための特別な塾や予備校があるのか尋ねたところ、塾などでなく各学校が生徒を厳しく指導することから、皆、良い小学校、中学校、高校へ子どもを入れようとする。そのために、家族ぐるみでの度々の引っ越しも珍しくない、という現代版「孟母三遷」のお話を伺い、驚きました。30年以上続いた、いわゆる「一人っ子政策」ならではの現象と言えるでしょう。

洛陽に到着した時には、岡山市との友好都市提携35周年を記念した、大森雅夫市長を団長とする友好訪問団が滞在中であり、その公式行事である「日中伝統音楽交流」に、我々も参加させていただきました。

岡山側からは、琴、篠笛、ひちりき等、洛陽側からは、古琴や土笛などが演奏されました。双方伝統的な衣装を身にまとっての登場でしたが、どの音色も聴衆を引きつけて止まず、言葉の壁を越えた芸術文化交流の素晴らしさと可能性の大きさに、あらためて気付かされました。

河南科技大学は、岡山県内の複数の大学との交流をこれまでも推進しており、主に1年間程度の学生交換を希望されています。教育・研究交流の分野としては、双方に学部学科がある、看護、介護、食品、情報、デザイン等が挙げられました。幾つかの学内施設を見学させていただき、今後、交流の具体的内容・方法を検討していくこととなりました。訪問したのは、ちょうど「学生スポーツ大会」の日であり、球技を中心に、学部学科対抗の試合が行われていました。大学なのに珍しいと驚きましたが、学生同士そして学生と教職員の信頼感や一体感を醸成する良い方法ではないかと思い直しました。

洛陽近郊に、世界遺産の「龍門石窟」があります。天候に恵まれたこともあり、視察に訪れました。早くも5世紀には造営が始まったとされていますが、エリアの雄大さに加え、10万體以上とも言われている石像の数の多さとそれらの見事さ、そして、川の水色、山の緑色、空の青色とのコントラストの素晴らしさに、ひとしきり感動しました。

本学も、長い歴史を誇る吉備路に立地しており、こうした中国の古都にある大学との交流を、これからも大切にしたいと思いました。

